

叙事詩の宗教哲学
—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XVIII) 1—

茂木秀淳

[229章] (D.237章、8688-8712, K.243章)

ヴィヤーサは言った。

- (1) さて、確固たる者は、知識という船を得た後、寂靜に住する²。流れに浮かんでも沈んでも、知識³のみを拠り所とするべし。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.189)

シュカは言った。

- (2) それによって活動の特徴とするダルマ、停止(を特徴とするダルマ)という対立を超える⁴知識⁵、あるいは学問とは何か。

ヴィヤーサは言った。

- (3) 注意を払わず (? vinā bhāvam)(物事を)自性によって観察する者は⁶、無知な者である。しかし、英知によって解脱をめざす者は、一切に繁榮をもたらす。
- (4) ある人々は⁷、ひたすら (ekāntabhāvena)、原因は自性であると考え。彼らは、草の座所を清めた後に (?)⁸、何も得ない。
- (5) そして、この立場に依存して振舞う思慮浅き人々は、自性を原因と認識した後、幸福 (śreyas) を得ない。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.104,fn.1)

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XVII)—』(信州大学教育学部研究紀要第 101 号 2000 年 12 月)に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿で用いるものは以下のとおりである。

- Hopkins[1901]: E.W. Hopkins, *Yoga-technique in the Great Epic*, JAOS vol.22, pp.333-379, 1901.
- Hopkins[1902]: E.W. Hopkins, *Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata*, JAOS vol.23, pp.109-155, 1902.
- Haas[1922]: George C.O.Haas, *Recurrent and Parallel Passages in the Principal Upanishads and the Bhagavad-Gītā*, JAOS, vol.42, pp.1-43, 1922.
- Frauwallner[1925]: E. Frauwallner, *Untersuchungen zum Mokṣadharmā. Die nicht-sāṃkhyaistischen Texte*, JAOS 45, 1925, pp.51-67. (Kleine Shchriften, pp.38-54)
- Johnston[1937]: Johnston, E.H., *Early Sāṃkhya*, London, 1937.
- Frauwallner[1953]: E. Frauwallner, *Geschichte der indischen Philosophie*, I.Band, Salzburg, 1953.
- Edgerton[1965]: Edgerton, F., *The Beginnings of Indian Philosophy*, Liverpool, London, Prescott, 1965.
- Bra.P.: *Sanskrit Indices and Text of the Brahmapurāṇa*, by Peter Schreiner and Renate Söhnen, Wiesbaden, 1987.

²P. āsthitaḥ D.,K.: ātmanaḥ

³P.,D.: jñānam K. vidyām

⁴P. nistarati dvayam D.,K.: nistarate dvayam

⁵jñānam Ca. jñānam jñānakāraṇam, jñāyate 'neneti vyutpattyā /

⁶P. paśyct D.,K. paśyan

⁷yeṣāṃ N. yeṣāṃ lokāyatānāṃ /

⁸P. pūtvā tṛṇabusīkām vai D. pūtvā tṛṇam iṣīkām vā K. dūrvātṛṇabṛsīkā ye Cv. (reading dūrvātṛṇabusīkā ye) paravañcanārthaṃ dūrvātṛṇādīkṛtaṃ bṛsīkam āsanaṃ yeṣāṃte / busīka の意味不明。bṛsī (Monier: the seat of the religious student or of an ascetic) の意味から類推した。敬虔な、あるいは規範的な行為によって得るものは何もない、ということか。

- (6) 迷乱と行為と心によって生じる⁹自性は破滅のためにある。このことは、この自性と他性の¹⁰両者について(以下のように)説明されている¹¹。
- (7) 耕作などの行為、穀物の収穫は、英知ある人々によって考案された (prakṛpta)。そして、乗物、椅子、家も。
- (8) 庭園も家も病気の薬も、英知ある人々が言い出し¹²、知識ある人々が従ったのである。
- (9) 英知は利益をもたらし、英知は幸福に到る。特徴の等しい(?)¹³王たちは、英知によって王権を享受する。
- (10) もろもろの生き物の(高低の)一切は知識によってのみ認識される。君、創造されたものの(一切は)学問によって(認識される)。学問こそが最高の境地である。
- (11) あらゆる種々の生き物の誕生は四種である。胎(生)、卵(生)、そして、芽(生)、そして汗(生)と¹⁴観察されるであろう。
- (12) 動くものは動かぬものよりすぐれていると見なすべし。なぜならば、区別すべき二つの対象において¹⁵、動くこと (ceṣā) はすぐれている、というのは適切であるから。
- (13) 動くものは二本足と多足の¹⁶二種であると言われている。数が多くとも二本足のものは多足のものよりすぐれている。
- (14) 二本足のものは、地上に住むものと他のもの(鳥)の¹⁷二種であると言われている。地上に住むものは(他のものより)すぐれている。なぜならば、彼らは食べ物を食べるから。
- (15) 地上に住むものは、中間のものと高いものの二種であると言われている。中間のものは(高いものより)すぐれている。種姓のダルマを考慮するから。
- (16) 中間のものは、ダルマを知るものと他のものの二種であると言われている。ダルマを知るものは(他のものより)すぐれている。彼らは、為すべきことと為すべからざることを考慮するから。
- (17) ダルマを知るものは、ヴェーダを知るものと他のものの二種であると言われている。ヴェーダを知るものは、(他のものより)すぐれている。なぜならば、彼らにおいて、ヴェーダは確立されるから。
- (18) ヴェーダを知るものは、教えるものと他のものの二種であると言われている。教えるものは(他のものより)すぐれている。なぜならば、彼らはあらゆるダルマを考慮するから。
- (19) あらゆるダルマにかなった行為を結果とする¹⁸ヴェーダは彼らによって認識される。祭儀と共に、綱要と共に、ヴェーダは彼ら教える者たちによって発せられる (viniṣṛtāḥ)。
- (20) ヴェーダを教えるものは、アートマンを知るものと他のものの二種であると言われている。アートマンを知るものは、(他のものより)すぐれている。なぜならば、再生と不生とを (janmājanma-) 考慮するから。

⁹mohakarmamanobhavaḥ Ca. mohakarmamanobhavaḥ, mohenājñānena, karmaṇā puṇyapāpalakṣaṇeṇena, manasā cāhaṃkāradīmatā janyate iti /

¹⁰P. svabhāvaparahāvayoḥ D.,K.: svabhāvaparihāvayoḥ

¹¹niruktam N. niruktaṃ nirvacanaṃ tattvam etad vakṣyamāṇaṃ śrīṇv iti śeṣaḥ /

¹²P.,K.: pravaktāro D. prayoktāro

¹³tulyalakṣaṇāḥ N. tulyalakṣaṇāḥ prajñādhiḥyād aiśvartyādhiḥyabhāḥ / Deussen: in gleicher Weise Ganguli: although they are possessed of attributes equal to those of persons over whom they rule

¹⁴P. jarāyvaṇḍam athodbhedaṃ svedaṃ cāpy upalakṣyet D.,K.: jarayujāṇḍajodbhijjasvedajaṃ copalakṣyet

¹⁵P. viśeṣyayoḥ D.,K.: viśeṣyayā Deussen: durch Unterscheidungskunst [Besser: von der Nicht-Bewegung, avicēṣṭayā nach Böhtlingks Konjektur] (この読みは、K7,D4,9,M7が保持している。)

¹⁶P.,K.: dvibahupādāni D. vai bahupādāni

¹⁷itarāṇi N. itarāṇi khecarāṇi /

¹⁸P. sarvadharmakriyāphalāḥ D.,K.: sadharmāḥ sakriyāphalāḥ

- (21) 二種のダルマを知るすべての者は、あらゆるダルマを知る者である¹⁹。彼は、棄却し²⁰、真実の考えをもち、自制し、自在なる者である²¹。
- (22) ダルマの知識に基盤を置くものを²²、神々はバラモンであると知る。彼は音声のブラフマンに²³通じ、高い(ブラフマンに) おいても確信は完成している。
- (23) 祭式に関し、神々に関し、内にあるものと外にあるものを知る人々に私たちは敬礼する²⁴。彼らは神であり、彼らこそ再生族である。
- (24) 彼らの中に、この世の一切の生き物と全世界は置かれている。彼らの偉大さに (māhātmya-bhāva) 匹敵するものは何もない。
- (25) 彼らは、最初と²⁵最後を超え、そして完全に行為を超えており、あらゆる四種の生き物を支配する自存者である²⁶。

[230 章] (D.238 章、8713-8733, K.244 章)

ヴィヤーサは言った。

- (1) 以前からこの振舞いが、バラモンに対して²⁷規定されている。知識をもつ者のみが、もろもろの行為を行いつつ、あらゆる点で成就する。(Cf.MBh.XII.227.10, 29)
- (2) もし、この点に関してそうでなければ(知識がなければ)、行為の決定において²⁸、一体、この行為の自性は知識なのか、あるいは行為なのかという疑問が生じるであろう²⁹。
- (3) この点に関し、今ここで、プルシャについての知識を知ろうと願うのであれば³⁰、私は証拠と知覚にもとづいて (upapattiyupalabdhībhyaṃ) 述べるであろう。それを聞くべし。
- (4) ある人々は、行為における原因は人の力 (pauruṣa) である、と言った。ある人々は、運命を(原因であると) 言い (cf.Hopkins[Great Epic] p.104)、他の人々は、自性を(原因であると) 言う。(Cf.MBh.XII.224.50)
- (5) 人の行為・運命³¹・自性による結果の生起³²というこの三種は、別のものである。しかしある人々は、区別しない³³。(Cf.MBh.XII.224.51³⁴)
- (6) それはそのようである。それはそのようではない。両者でもある。両者でもない³⁵。(とこのように、) 行為に住する者は³⁶さまざまに語るであろうが、真理に住する者は等しく見る。(Cf.MBh.XII.224.52³⁷)

¹⁹P. sa sarvaḥ sarvadharmavid D.,K.: sa sarvajñāḥ sa sarvavit

²⁰P.,D.: sa tyāgī K. satyāsīḥ

²¹P. sa tu kṣāntaḥ sa īśvaraḥ D.,K.: satyaḥ śucir atheśvaraḥ

²²P.,K.: dharmajñānapraṭiṣṭhaṃ D. brahmajñānapraṭiṣṭhaṃ

²³śabdabrahmaṇi N. śabdabrahmani vedaśāstre /

²⁴P.,K.: jānanti tān namasyāmas D. jñānānvitā hi paśyanti

²⁵P. ādiṃ te nidhanaṃ caiva D. ādyante nidhanaṃ caiva K. ādyantanidhanaṃ caiva

²⁶svayaṃbhūvaḥ Cv. svayaṃbhūvaḥ, svayaṃ svatantraḥ paramātmā, bhūḥ sthānam eṣāṃ te tathoktāḥ /

²⁷brāhmaṇasya Ca. brāhmaṇasya brāhmaṇajñānāya pravṛtasya /

²⁸P.,K.: karmanīścaye D. karmasiddhaye 「行為とは何かを決める時に」ということか。

²⁹P.cd は、kiṃ nu karma svabhāvo 'yaṃ jñānaṃ karmeti vā punaḥ、と karma svabhāvo を二語にしているが、K. は (kiṃ tu) karmasvabhāvo と合成語にしている。P. では読むことができず、K.(と D.?) に従った。

³⁰P. tatra ceḥa vivitsā syāj D. tatra vedavidhiḥ sa syāj K. tatra vedavivitsāyām

³¹pauruṣaṃ karma daivaṃ ca N. pauruṣaṃ iha janmānare vā kṛtaṃ karma daivaṃ grahāḥ kāla ity yāvat svabhāvaḥ svarūpamātram /

³²P.,K.: phalavṛttisvabhāvataḥ D. kālavṛttisvabhāvataḥ Ś1,K1,2,DS1 のヴァリアント phalavṛttisvabhāvataḥ に従った。P.,D.,K. とも phala- あるいは kāla- 以下を一つのコンパンドとしているが、そうすると「三種」が何かはつきりしない。Deussen は kālavṛttisvabhāvataḥ とする Dn4 を探っているようである。

³³avivekaṃ Cn. avivekaṃ samuccayam / Cs. avivekaṃ vivekaraḥitaṃ mūḍhabhāṣitam ity arthaḥ /

³⁴この詩節の検討に基づいて、XII.224.51 の読みを以下のように訂正する。

「しかしある人々は、人の行為・運命・自性による結果の生起、この三種を区別せずに、これら三種は別ではない、(と言った)。」

³⁵P. evam etat na cāpy evam ubhe cāpi na cāpy ubhe D., K.: etad evaṃ ca naivaṃ cobhe nānubhe tathā

³⁶karmasthā Cn. karmasthā ārhatāḥ /

³⁷MBh.XII.224.52 の ab 句は、evam etac ca naivaṃ ca yad bhūtaṃ srjate jagat /

- (7) トレーター・ユガにおいて、ドヴァーパラ・ユガにおいて、そしてカリ・ユガにおいて生まれた人々は、疑いをもつ。クリタユガにおいては人々は、熱力をもち、寂靜にして、真理に住する。
- (8) すべての人々は、リグ・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダそしてヤジュル・ヴェーダにおいて、別のものを見ることはない。愛欲と嫌悪を(これらとは)別のものと見て、苦行が尊ばれる。(Cf.MBh.XII.224.63)
- (9) 苦行のダルマを備え、苦行を常とし、すぐれた洞察力をもつものは、それ(苦行)によって、心によって望むあらゆる欲望を得る。
- (10) 彼は、そうなった後世界を創造するものに苦行によって達する。そしてそれから、そのようになった彼は、あらゆる生き物の主となる³⁸。(Cf.MBh.XII.224.54)
- (11) ヴェーダに通じたる者によって、ヴェーダの文章の中に語られた秘密は³⁹ヴェーダンタ(ウパニシャッド)において再び、はっきりと正しく順序に従って⁴⁰述べられている。(Cf.MBh.XII.254.58, Hopkins[Great Epic] p.93, fn.1)
- (12) クシャトリヤは行為を祭式とし⁴¹、ヴァイシャは供物を祭式とし、シュードラは奉仕を祭式とし、そして再生族は低誦を祭式とする⁴²ことが伝えられている。(Cf.MBh.XII.224.61)
- (13) ヴェーダ学習によってこそ、再生族は、為すべきことの成就者となろう。他のことを為そうと、為すまいと、友好的であれば、バラモンと言われるのである。(Cf.Manu 2.87cd)
- (14) トレーターユガの最初には、あらゆるヴェーダ、祭式、ヴァルナとアーシュラマがあった。しかし、寿命の短縮によって、これらは、ドゥヴァーパラ・ユガにおいて弱まった。(Cf.MBh.XII.224.64)
- (15) ドゥヴァーパラ・ユガにおいてもろもろのヴェーダは衰退した。カリ・ユガにおいても同様である。カリ・ユガの終りには、(ヴェーダは)見られることもあるが、見られないこともしばしばである。(Cf.MBh.XII.224.62cd, 66ab)
- (16) そこではアダルマによって圧迫され種姓の義務は消滅する。そして牛、地、水、薬草の精力(rasa)も(消滅する)。(Cf.MBh. XII.224.66cd)
- (17) (そこでは) 諸々のヴェーダ、ヴェーダのダルマ、そして生活期、そして自分の義務に住する動かぬものと動くものたちは、アダルマによって覆われて、変化する。(Cf.MBh.XII.224.68)
- (18) 雨が、あらゆる地上の生き物に降り⁴³あらゆる方向にそれらの手足を創造するのと同様に、ヴェーダは、ユガごとに(あらゆる方向にその支分を創造する)。(Cf.MBh.XII.224.69)
- (19) それに基づいて(すべてが)進行し⁴⁴、(すべてに)行き渡っている⁴⁵時の多様性、無始無終について、私はかつて語った。(Cf.MBh.XII.224.71)
- (20) (時という)創造者は、生き物のこの世の発生の場所であり⁴⁶、消滅であり、制御者である⁴⁷。対(dvandva)によって創造された生き物でも、自性によってさまざまに活動する⁴⁸。(Cf.MBh.XII.224.72, Hopkins[Great Epic] p.104, fn.1)

となっており、そこでの主題は「世界創造」である。この章の主題は「知識と行為」で両章の主題は必ずしも同じではない。また Hopkins は、二重否定の表現に関連してこの箇所と言及している。(Cf.Hopkins[1902] p.119, fn.2)

³⁸P. tadbhūtaś ca tataḥ sarvo bhūtānāṃ bhavati prabhuḥ D.,K.: tadbhūtaś ca tataḥ sarvabhūtānāṃ bhavati prabhuḥ N. tadbhūto brahmabhūtaḥ / P. の読み (sarvo bhūtānāṃ) では理解できない。D.,K. および P.XII.225.54(sarveṣāṃ bhūtānāṃ) を考慮し、韻律上長短いずれも可能な音節なので、sarvabhūtānāṃと読んだ。

³⁹gahanam N. gahanam ajñātam / Ca. gahanam, gahanam iva leśataḥ darśitam /

⁴⁰P.,K.: kramayogena D. karmayogena

⁴¹ārambhayajñāḥ Cs. ālambhaḥ paścālambhaḥ / yad vā pāthāntare rakṣāhetuṣu yuddhādiṣu ārambhayajñāḥ /

⁴²japayajñā 各種姓の義務について、MBh.XII.224.61 では再生族の義務は苦行(tapas)とされている。この箇所の異読としても Ds. に tapoyajñāがある。

⁴³P.,D.: vṛṣṭir bhaumāni varṣati K. vṛṣṭyā tṛpyanti prāvṛṣi

⁴⁴P. yataḥ saṃyānti yānti ca D. sūte yac cānti ca prajāḥ (=P.XII.224.71) K. yataḥ saṃyānti ca prajāḥ

⁴⁵P. viṣṭam D. niścitam K. vihitam (=P.XII.224.71)

⁴⁶P. dhātedam prabhavasthānam bhūtānāṃ D.,K.: yac cedam prabhavaḥ sthānam bhūtānāṃ

⁴⁷saṃyamō yamaḥ N. saṃyamaḥ pralayaḥ yamo niyantāntaryāmi /

⁴⁸P. svabhāvena pravartante D.,K.: svabhāvenaiva vartante

- (21) 創造、時間、堅忍、ヴェーダ、行為者、為すべきこと、祭式の果報。汝が私に尋ねたことはこのように、汝に語られた。(Cf.MBh.XII.224.73)

[231 章⁴⁹] (D.239 章, 8734-8767, K.245 章)

ビーシュマは言った。

- (1) (シュカは) このように言われ、最高の聖仙の教えを称賛した後、この解脱とダルマと利益に関連したことを尋ね始めた。

シュカは言った。

- (2) 子孫をもち⁵⁰、ヴェーダ聖典に通じ、祭式を行い、長老にして、賢明⁵¹かつ悪意なき人は、どのようにして伝承もされず(ヴェーダに)説かれてもいない⁵²ブラフマンを理解するのか。
 (3) 苦行によって、梵行によって、一切の棄却によって、英知によって、サーンキヤあるいはヨーガにおいて(理解するのか)。このように尋ねられた汝は、私に語るべし。
 (4) 人々によって、心のそしてもろもろの感官の一点への集中が達成される手段を説明すべし。

ヴィヤーサは言った。

- (5) 学問と苦行なしに⁵³、感官の制御なしに、一切の棄却なしに⁵⁴、誰も成就に達しない⁵⁵。
 (6) 大元素はすべて、自存者のかつての創造である。それらは、主に氣息をもつ者の集団に、(そして) 身体をもつ者に入り込んだ。
 (7) 体は地から、骨髄は⁵⁶水から、両目は火からなり、呼気吸気の抛り所は風であり、身体をもつ者の穴には虚空がある、と伝えられている。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.177)
 (8) 歩みにおいてはヴィシュヌが、力においてはインドラが、腹ではアグニが食べたものを得る。両耳のもろもろの方位は聞くことにおいて(食べたものを得)、舌では言葉の神サラスヴァティーが(食べたものを得る)。(Cf.Hopkins[Great Epic] pp.111-112,133)
 (9) 両耳、皮膚、舌、両目、そして五番目の鼻は、感官と言われ、見る手段であり⁵⁷、摂取の成就のための⁵⁸門である。(Cf.MBh.XII.123.5)
 (10) 音声、接触、色、味、そして五番目として香が(感官の対象である)。感官は、これらの対象を、別々に、心に対して (manaso) 示す⁵⁹。
 (11) あたかも御者が従順な馬にくびきをかけるように、心 (manas) は感官をつなぎとめる。そしてさらに心臓に住む生き物の本体が⁶⁰常に心をつなぎとめる。(Cf.Kaṭha U. 3.3-5, Śvet. U. 3.13, Haas[1922] p.23, No.359, Böllingk, Indische Sprüche, No.1118)
 (12) 心は、(手綱を) 引きそして緩めることによって (niyame ca visarge ca)、これらすべての感官を支配する。そして生き物の本体は⁶¹心を(支配する)。

⁴⁹Frauwallner は、231-233 章を、224-226 章とともに非サーンキヤ説に言及する章として取り上げている。(Cf.Frauwallner[1925])

⁵⁰P.,K.: prajāvān D. prajāvān

⁵¹P. vṛddhaḥ prajāno D.,K.: kṛtaprajāno

⁵²anāgatam anaitiḥyam Ca. anāgataṃ, pratyakṣādīpramāṇānavadhṛtam / anaitiḥyam, itihāsādāv aśrutam / (Cf. Hopkins[Great Epic] pp.145-146)

⁵³nānyatra vidyātapasor Cs. tapaḥ sātūviko nivṛttidharmaḥ /

⁵⁴P.,D.: sarvasaṃtyāgāt K. lobhasaṃtyāgāt

⁵⁵231 章 vv.5-6, 11-12,15-34 は Edgerton の英訳がある。(Edgerton[1965] pp.267-269)

⁵⁶P. sāro D. sneho K. sroto

⁵⁷P. darśanānīndriyoktāni D. darśanīyendriyoktāni K. daśa tānīndriyoktāni

⁵⁸āhārasiddhaye N. āhāraḥ śabdādigrāhaḥ Deussen: zum Zwecke der Ernährung dienend

⁵⁹P.indriyāṇi pṛthak tv arthān manaso darśayanty uta D. indriyārthān pṛthag vidyād indriyebhyas tu nityadā K. indriyāṇi pṛthak svarthān manasā darśayanty uta

⁶⁰bhūtātāmā N. bhūtātāmā buddhyupādihijivāḥ Deussen, Edgerton とも「元素我」と解している。(Deussen: Elementar Ātman Edgerton[1965] p.267: the elemental self)

⁶¹bhūtātāmā Ca. bhūtātāmā ahaṃkāraḥ Cn. buddhyupādir jivāḥ /

- (13) 感官、感官の対象、自性、意識(cetanā)、心(manasa)、呼気と吸気、そして個我(jīva)は⁶²、常に、生きている者の(dehinām)身体の中に存在する。
- (14) サットヴァには拠り所はない⁶³。属性である音声は(?)意識ではない⁶⁴。なぜならばサットヴァは(意識の)火を創造するが⁶⁵、決してもろもろの属性を創造することはないから。(Cf.MBh.XII.187.43,240.20)
- (15) このように第十七番目(アートマン)は⁶⁶、身体の中で16の要素(guṇa)によって覆われている。英知あるバラモンは、心によって自己において自己(アートマン)をみる。(Cf.Haas[1922] p.31, No.541)
- (16) これ(アートマン)は、目によっても、あらゆる感官によっても見ることはできない。心が照明されると⁶⁷、大きなアートマンは輝き出る。
- (17) その、音声なく触感なく色なく、味なく香なく、不変にして、身体なく、感官なきものを、自分の身体の中に見るべし。(Cf.Kāṭha U. 3.15; Haas[1922] p.23, No.364)
- (18) 目に見える死すべき体の中に⁶⁸、不死にして⁶⁹(目に見えぬ)未顕現のものが⁷⁰住む。(これを)見るものは、死後、ブラフマンと同一になるであろう⁷¹。
- (19) 学問と家系を備えたバラモン、牛、象、犬、犬を料理する者において、賢者は同一のものを見る⁷²。(Cf.MBh.VI.27.18(BhG.5.18), Haas[1922] p.41, No.744)
- (20) 動くもの動かぬものすべての生き物において、彼の唯一なる大きなアートマンは住む。この大きなアートマンによって、この世の一切は遍充されている(tatam)。(Cf.MBh.VI.30.22, 31.4, 40.46(BhG.8.22, 9.4, 18.46), Haas[1922] p.40, No.756)
- (21) 個我(bhūtātman)は、あらゆる生き物の中に自分を見、自分の中にあらゆる生き物を見る時、ブラフマンに至る。(Cf.Īśa U. 1.6, Manu 12.91, Haas[1922] p.24, No.402, Hopkins[Great Epic] p.40)

⁶²jīvaś Johnstons は、この箇所を、「jīva は身体内に常に他の要素と共に存在すること」の事例として言及している (cf. Johnstons[1937] p.45)。Hopkins は身体を構成する 16 の要素との関連において (cf. Hopkins[Great Epic] p.168)、また氣息説との関連において (cf. Hopkins[Great Epic] p.171) 言及している。

⁶³āśrayas nāsti sattvasya Ca. āśrayaḥ upādānakāraṇam / sattvasya ātmanaḥ // Cn. sattvasya buddher āśrayaḥ prāgukto dehaḥ / Cv. sattvasya prāṇisamūhaya / パラレルである MBh.XII.187.43 は「sattva よりも上位の存在はない」ことを意図している。ここは文脈が、従って意味も、明らかでない。

⁶⁴p. guṇaśabdō na cetanā D. guṇāḥ śabdō na cetanā K. guṇāḥ sattvasya cetanā Ca. guṇatve kāryatvādīnā śabdyata iti guṇaśabdō buddhyādir viṣayāntaḥ / MBh.XII.187.43 は、a 句はāśrayo nāsti sattvasya と完全に一致しているが、b 句は、kṣetrājñāsyā ca kāścana と全く異なっている。

⁶⁵sattvaṃ hi tejaḥ sṛjati Ca. sattvaṃ ātmā tejo buddhiṃ sṛjati / Cn. tejaḥ vāsānā sattvaṃ sṛjati, na tu guṇān / Cs. tejaḥ darśanasparśanādīsāmarthyam / Ca. は主語を sattva、Cn. は主語を tejas ととっている。パラレルの MBh.XII.187.43c(sattvaṃ manaḥ saṃsṛjati) では主語は sattva である。第 13 詩節は 16 の要素をあげて第 15 詩節につながるが、第 14 詩節は前後の文脈との接点がない。(Cf. Hopkins[Great Epic] p.160,fn.2)

⁶⁶saptadaśaṃ Ca. saptadaśaṃ ātmānaṃ ṣoḍaśabhir vikārair bhūtair ekādaśendriyaiḥ / Cn. saptadaśaṃ cid ātmānaṃ ṣoḍaśabhiḥ pañceniṛyāni pañcendriyārthāḥ svabhāvādayaś ca ṣaṭ taiḥ / Cs. ṣoḍaśabhiḥ ekādaśendriyapañcamahābhūtaiḥ / どれを 16 の要素とするかは、注釈によって異なっている。Cn. は第 13 詩節に列挙された要素を 16 の要素と見なしている。しかし身体内に存在する要素として indriyārtha(「感官の対象」)が挙げられるのはおかしい上、第 13 詩節の svabhāva から jīva までの六種は唐突である。第 13 詩節にまとめて列挙しなくとも、第 6 詩節から第 10 詩節に挙げられている項目を合計すると、五元素、五種の神格、五種の感官、manas の 16 になる。第十七番目を bhūtātman、その同義語として ātman(v.15)、mahān ātman(v.16)を考えれば、これで数値的には問題はなく、第 13 詩節の項目は必要でなくなる。第 14 詩節が文脈からはずれていることを考慮すると、第 13、14 詩節はオリジナルな詩節として考えられないのではないか。(Cf. Frauwallner[1925] p.56.11-26)

⁶⁷p. sampradīptena D. tu pradīptena K. dīpabhūtena

⁶⁸p. vyaktadeheṣu martyeṣu D. sarvadeheṣu martyeṣu K. sarvadeheṣu martyeṣu

⁶⁹p. amaram āśritam D. param āśritam K. amṛtam āhitam

⁷⁰avyaktaṃ Frauwallner は、K. の読みに依りながら、avyakta を前出の bhūtātman と同一視している。(Cf. Frauwallner[1925] p.56.1-4) しかしここでは、avyakta は実体というよりも、Edgerton の理解のように、これまで出て来た bhūtātman あるいは ātman の形容詞であろう。

⁷¹kalpate brahmabhūyase という定型的表现は、MBh.XII.154.25, 208.19, 234.8, 243.7 に見られる。

⁷²samadarśinaḥ Cv. samarṇā nārāyaṇaṃ paśyatīti samadarśinaḥ / N. samarṇā brahmaiva paśyanti te samadarśinaḥ /

- (22) 知識のアートマンが自己の中にいる限り、自己は最高我の中にいる⁷³。常にこのように知る者は、不死となろう。
- (23) あらゆる生き物の本性となり⁷⁴、あらゆる生き物に対して慈悲ある⁷⁵足跡なきものの⁷⁶道に、足跡を求める者は、神々でさえも、迷うであろう⁷⁷。
- (24) 空中に鳥の道は見ることはできず、水中に魚の⁷⁸道は見ることはできないのと同じように、たいへん大きなアートマンは⁷⁹、見ることはできない。(Cf.MBh.XII.154.28, XII.174.19; Dhammapada 92)
- (25) 時は⁸⁰、あらゆる生き物を、自分で自分の中で食べる。しかし、そこにおいて時が食べられるものを、この世では誰も知らない。(Cf.Mait. U. 6.15, Haas[1922] p.36, No.653, Hopkins[Great Epic], p.166.fn.3)
- (26) それを、だれも、上方にも、斜めにも、下にも、また遠くにも⁸¹、中間にも、どこにも捉えることはできない。
- (27) これらすべての世界は、(その)内部にある⁸²のであって、これらのうち(その)外部に存在するものは何もない。あたかも弦を離れた弓のように、千里(?)到達することができるものでも⁸³、
- (28) 心の速さがあったとしても、根源の(kāraṇasya) 端に行きつくことはないであろう。その微細なものより微細なものはなく、それより大きなものもない。(Cf.Śvet. U. 3.13)
- (29) (それは)あらゆる方向に手足の先をもち⁸⁴、あらゆる方向に目と頭と口をもち、あらゆる方向への耳をもち、世界の中で、一切を覆って存在している。(Cf.MBh.VI.35.13(BhG.13.13), XII.291.16, Śvet U. 3.16, Haas[1922] p.42, No.805)
- (30) それは実に極微より微細であり、大きなものより大きく、そしてあらゆる生き物の中に動くことなく存在しているが、目には見えない(dr̥śyate)。(Cf.Śvet.U. 3.20, Kaṭha U. 2.20, Haas[1922] p.31, No.544)

⁷³P.,D.: yāvān ātmani vedātmā tāvān ātmā parātmani K. yāvān ātmani me hy ātmā tāvān ātmā parātmani Cv. vedātmā vedapurusaḥ / ātmā jīvātā / paramātmanīti vivekaḥ syād iti yogyapadādhyāhārah / yāvān yāvān vedābhyāso bhavati tāvat tāvad ātmavivekabuddhir bhavati bhāvāḥ / N. vedasya ātmā śabdāḥ sa ātmani svasvarūpe yāvān deśataḥ kālataś ca yāvātpramāṇo 'sti tāvān ātmā jīvaḥ sarvo' pi vāco viśaya ātmety arthaḥ / 注釈書は vedātmā を合成語と見なし、veda をヴェーダ聖典と解釈している。Deussen, Edgerton も同様に解しているが、ここでは「ヴェーダ」は問題になっていない。Hopkins は、bhūtātman が MBh.XII.196.7 で jñānātmavān と表現されていることと関係させ、veda を jñāna と解し、この箇所を次のように訳している。

“The soul is as much in the All-soul as there is knowledge-soul in itself” (Hopkins[Great Epic] p.40,fn.2)

veda=jñāna が成立すれば、このように理解することができるので、ここでは Hopkins に従う。しかし、vedātman の veda を定動詞として捉え(c句では veda は定動詞として用いられている)、parātman を「他者のアートマン」と解し、「アートマンは、自分の中で知る(働きをする)限り、他の者の中で知る(働きをする)」というように理解することも可能であろう。K. の a 句で vedātmā の代わりに me hy ātmā と一人称に読んでいることも、parātman は「他者」すなわち「一人称ではないもののアートマン」という理解を支持しよう。しかしそもそも「他者のアートマン」という発想があったことが確認されないので、ここでは可能性の指摘のみに留める。

⁷⁴sarvabhūtātmabhūta この語の用例については、Johnston[1937] pp.48-49 参照。

⁷⁵P.,K.: sarvabhūtāhitasya D. vibhor bhūtāhitasya

⁷⁶apadasya Cs. apadasya padanyāsarāhitasya, padanyāsalakṣaṇarahite brahmaṇi vartamānasya, mārgāgāmye paramātmani padaiṣṇaḥ padanyāsaṃ kartum icchantaḥ / Cv. apadasya, padyate jñāyate aneti padaṃ prākṛtadehaḥ tadrahitasya /

⁷⁷muhyanti apadasya sandhi が無視されている。音節数の調整のためか。(Cf.MBh.XII.254.32, 261.21, XIII.114.6; Brahmasūtra Śāṅkara Bhāṣya 4.2.14)

⁷⁸P. śakunīnām ivākāśe jale vāricarasya vā D.,K.: śakuntānām ivākāśe matsyānām iva codake

⁷⁹P. tathaiva sumahātmanaḥ D.,K.: tathā jñānavidāṃ gaiḥ

⁸⁰kālaḥ Cn. kāla uktaṛūpo jīvaḥ, pacati jarayati /

⁸¹P. nādhō na ca tirāḥ punaḥ D. nādhō na ca punaḥ punaḥ K. nādhāś carati yaḥ punaḥ K. の読みでは、概略「どこにも動かぬものを誰もどこにも捉えられない」となる。

⁸²P. antasthā D.,K.: antasthā

⁸³P.,K.: yaḥ sahasraṃ samāgacched D. yady aśasraṃ samāgacched

⁸⁴P. sarvataḥpāṇipādāntaṃ D.,K.: sarvataḥpāṇipādāṃ tat Cs. sarvata iti sārvaivibhaktikas tasiḥ sarveṣāṃ pāṇayaḥ pādāś ca yasya /

- (31) アートマンには不滅と滅というこの二種の状態がある。滅する(状態は)あらゆる生き物において(滅し)、一方、不滅(な状態)は神聖にして不死である⁸⁵。
- (32) 白鳥(=アートマン)は、九つの門をもつ都城(=身体)に至って、とどまり⁸⁶支配する。それは、動かぬもの、動くものすべての生き物を支配する。(Cf.Śvet.U. 3.18, MBh.VI.27.13(BhG.5.13), Katha U. 2.20, Haas[1922] p.31, No.543, Hopkins[Great Epic] pp.30, 166, fn.3)
- (33) 消滅するか崩壊するかする新たな身体の拠り所として⁸⁷、不生(aja)(なるアートマン)が白鳥である、と彼岸を見る人々は言った。
- (34) 白鳥と言われたのは(アートマンの)不滅(な状態)であり、また不動のもの(kūṭastham)は不滅(な状態)である。賢者は、その不滅なるものに達して、氣息と再生を離れる。

[232章] (D.240章、8768-8803, K.246章, cf.Br.P.236.36-68(pp.760-762))

ヴィヤーサは言った。

- (1) よき息子よ、汝が質問したので、ここで、ありのままに真実に従い、サーンキヤの論理と結びついたものを私は語った⁸⁸。
- (2) 今やヨーガの実践(yogakṛtya)をすべて汝に語ろう⁸⁹。それを聞くべし。(それは)ブッディとマナスの、そして感官の完全な集中であり⁹⁰、そして、瞑想している自己についての⁹¹この上なき認識である。
- (3) それはすなわち、静まり、自制し、大我に精通し⁹²、自己に歓喜し、目覚め⁹³、清浄な行為を行う者によって知らるべきものである。
- (4) 詩人たちが、愛欲、怒り、貪欲、恐怖、そして五番目として眠りの五種と知ったヨーガの妨げ(yogadoṣa)を断ち切った後⁹⁴(知らるべきものである)。(Cf.MBh.XII.289.11, Frauwallner[1953] p.140.9-10)
- (5) 怒りは冷静さによって打ち勝ち、愛欲は、望みの排除によって打ち勝つべし。眠さは、意識に訴えることによって⁹⁵、確固として断ち切るべし。
- (6) 堅忍によって男根と腹を守り、目によって手足を守るべし。目と両耳を心(manasa)によって守り、そして心と言葉を行為によって⁹⁶(守るべし)。
- (7) 正気によって恐怖を捨てるべし。英知を用いて貪欲を(捨てるべし)。このようにこれらヨーガの妨げに常に怠りなく打ち勝つべし。
- (8) 諸々の祭火とバラモンとを讃えるべし。そして、神々を礼拝すべし。他人を傷つける⁹⁷、暴力的でわがままな言葉を避けるべし。(Cf.MBh.XII.227.9)

⁸⁵P. divyaṃ hy amṛtam D. divyaṃ tam ṛtam K. divi hy amṛtam

⁸⁶niyato N. niyato 'cañcalaḥ / Cs. viniyato baddhaḥ /

⁸⁷P. saṃśrayeṇa D.,K.: saṃcayena

⁸⁸232章 vv.1-4, 9-34はEdgertonの英訳がある。(Edgerton[1965] pp.270-273)

⁸⁹yogaの実践を主題とするこの章は、Hopkinsが概略を紹介し、関係する事柄に言及している。(Cf.Hopkins[1901] pp.343-344, Hopkins[Great Epic] pp.107, 120(brahman と guṇa), 141,fn.3(saṃkalpa), 160(buddhi-sattva), 181(五種の欠点),182(dhāraṇā), etc)

⁹⁰ekatvam Cn. ekatvaṃ buddhimātreṇāvasthānam, buddhivṛttinirodha iti yāvat /

⁹¹P. ātmano dhyāyinas D. ātmano vyāpinas K. ātmano 'vyathinas

⁹²P. adhyātmaśīlinā Cs. adhyātmaśīlinā dehātmaśīlinā dehātmanavivekatapareṇa /

⁹³buddhena Ca. buddhena avicalatā tattvajñānāt /

⁹⁴P. samucchidya K. samucchidyāt この gerund のあと定動詞にあたるものがないので、前詩節の bodhavyaṃ を補って理解した。K.はこの点を配慮して gerund に代えて optative を用いていると考えられる。

⁹⁵satvasaṃśevanād Cn. sattvasaṃśevanāt sattvena buddhyā saṃśevanam pariśīlanam arthānām tena /

⁹⁶karmaṇā Cn. karmaṇā yajñādīnā /

⁹⁷P. ruṣitām D.,K.: usātām

- (9) ブラフマンは、熱からなる精液であり⁹⁸、この世の一切はその精髓である。(この) 唯一の存在から動くものと動かぬものの二種が生じた⁹⁹。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.120)
- (10) 禅定、学習、布施、真実、羞恥、正直、自制、清浄、食物の清浄、感官の抑制、(Cf.MBh.XII.227.7ab, Frauwallner[1953] pp.139-140)
- (11) これらによって、威光を増大し、罪を除く。その人のあらゆる目的は達成され、認識は¹⁰⁰高まる。(Cf.MBh.XII.227.7cd)
- (12) あらゆる生き物に対して等しく、得たもの得られぬものそのままに (labdhālabhdhena) 生活し、罪を除き¹⁰¹、精力に満ち、軽い食事をとり、感官を抑制し、欲望と怒りを支配して、まさにブラフマンの境地を求めんとすべし¹⁰²。(Cf.MBh.XII.227.8)
- (13) 心と感官とを注意深くして集中し、前夜と後夜に¹⁰³、自ら心を保持すべし。(Cf.MBh.XII.242.4ab)
- (14) 五感をもつ者のいずれか一つの感官に隙ができる (chidram) と、皮袋の底から水が流れ出るように、そこからこの者の英知は流れ出す¹⁰⁴。(Cf.MBh.V.33.65, Manu 2.99, Frauwallner[1953] p.136.31-34)
- (15) ヨーガを知る者は、まず最初に心 (manas) を捕捉すべし。漁師が始末に悪い魚を¹⁰⁵(最初に捕えるように)。その後、耳を、その後、目を、舌を、鼻を (捕捉すべし)。(Cf.Frauwallner[1953] p.137.7-8)
- (16) それから行者は、それらを統御して心の中に静止せしむべし¹⁰⁶。そして、願望を除いて、心を自己の中に保持すべし。
- (17) 行者は、五種 (の感官) を、意識して¹⁰⁷集中し、心の中に静止せしむべし。心を六番目とするこれら (感官) が、自己の中に¹⁰⁸留まり、すべて静止して¹⁰⁹、清澄になった時、その時、ブラフマンは輝く。
- (18) 煙なく輝く光のように¹¹⁰、輝く太陽のように、虚空における稲妻の火のように、(行者は) 自己によってアートマンを見る¹¹¹。そのとき、一切は一切において見られる。(アートマンの) 遍在性の故に (vyāpakatvāt)。(Cf.Frauwallner[1953] p.135.16-19)
- (19) 偉大な自己をもち、賢明にして、堅忍を保ち、偉大な英知をもち、あらゆる生き物の幸福に満足するバラモンたちは、それを見ることができる。(Cf.MBh.XII.242.7cd)
- (20) 限られた時間に (Cf.MBh.XII.232.30)¹¹²このように行為しつつ、誓約を守り、秘密に一人座るならば、不滅との同一性に¹¹³到るであろう。

⁹⁸śukraṃ N. śukraṃ bījabhūtaṃ pradhānam

⁹⁹P. ekasya bhūtaṃ bhūtasya dvayaṃ sthāvarajaṅgamam D. etasya bhūtaṃ bhavitavyaṃ dṛṣṭam sthāvarajaṅgamam K. etasya sūtrabhūtasya dvayaṃ sthāvarajaṅgamam Ca. bhūtaṃ satyaṃ na tu vivartavādīnām ivāsatyam / bhūtasya siddhasyākālpitasya /

¹⁰⁰vijñānaṃ Ca. vijñānaṃ sākṣātkāralakṣaṇam /

¹⁰¹P. dhutapāpmā D.,K.: dhūtapāpmā

¹⁰²ninīṣed Ca. ninīṣet, nididhyāsanenechet / Cn. ninīṣed vaśīkartum icchet / Cs. ninīṣed ātmānam iti śeṣaḥ /

¹⁰³P. prāgrātrāpararātreṣu D.,K.: pūrvarātrāparārḍhe ca

¹⁰⁴P. sravati D.,K.: sravate パラレルが見られる MBh.V.33.65 では動詞は sravati、Manu 2.99 では kṣarati となっている。

¹⁰⁵P. kumīnān D.,K.: kumīnam Ca. kumīnān kṣudramatsān / Cn. kumīnān jāladamśakṣamam / Cp. (reading kṛmīlān) kṛmīn lānti grhṇantīti kṛmīlā matsyāḥ / tān yathā upāyenaikacittatayā badhnātī /

¹⁰⁶manasi sthāpayed Ca. manasi sthāpayet viśayavimukhāni kuryād ity arthaḥ /

¹⁰⁷P. pañca jñānena D.,K.: pañcendriyāṇi Ca. (pañcajñānena) pañcaviśayaniṣṭhena jñānena /

¹⁰⁸P.,K.: cātmani D. yathātmani

¹⁰⁹saṃsthāya Ca. saṃsthāya samyagrūpeṇātmapravaṇatayā sthitvā / Cn. saṃsthāya nāśaṃ prāpya / prasīdanti saṃkalpajaṃ kālūṣyaṃ tyajanti / Edgerton[1965]: standing firm Deussen: zusammengedrängt

¹¹⁰P.,D.: dīptārcir K. saptārcir

¹¹¹P. paśyaty ātmānam ātmanā D.,K.: dṛṣyate 'tmā tathātmani

¹¹²parimitaṃ kālam N. parimitaṃ ṣaṃmāsamātraṃ tathā ca śrūtiḥ 'ṣaḍbhir māśais tu yuktasya nityayuktasya yoginaḥ / ānandaḥ paramo guhyaḥ samyagyogah pravartate' iti /

¹¹³P. akṣarasāmyatām D.,K.: akṣarasāmyatām Cn. (-sāmyatām) samatām lakṣaṇabhedābhāvaṃ, svārthe śyañ /

- (21) (この間行者には) 惑乱、混乱、嗅覚・聴覚・視覚における渦巻¹¹⁴、さまざまな超自然現象、味覚と触感、冷と暖、風の形相 (が生じる)。
- (22) ヨーガによって、幻影と錯乱とを¹¹⁵経験しても (upasamgrhya)、真理を知る者はそれらに関心を払うことなく、まさに自分自身によって¹¹⁶(それらを) 停止すべし。
- (23) 聖者は、(感官を) 制御し、三時に¹¹⁷ヨーガにおける実修を行うべし。山頂で、そして聖廟で、木の先端で、行なうべし (yojayet)。
- (24) 牛小屋の中で (牛乳で一杯の) 器に注意するように¹¹⁸感官の群れを統御し、常に集中して思考すべし。ヨーガから心をそらしてはならない。
- (25) 動き回る心を統御することができるような方法があれば、いかなる方法でも集中して¹¹⁹それに従うべし。そして、そこから逸脱してはならない。
- (26) 心を一つに集中した者は、住むために、山の空っぽの洞穴や寺院や空家に行くべし。
- (27) (ヨーガ行者は)、他のものに対し、言葉によっても、行為によっても、また心によっても愛着をもってはならない¹²⁰。無関心を保ち、食事を抑え、(何かを) 得ても得なくとも (cf.MBh.XII.232.12) 等しくあるべし。
- (28) ある人が彼を称賛したとしても、そして別の人が彼を非難したとしても¹²¹、この両者に対して等しくし、快不快を思ってはならない。
- (29) (何か) 得ても喜ぶべきではなく、得られなくとも思い煩うべきではない (cintayet)。あらゆる生き物に対して等しく、風と同じように¹²²あるべし。
- (30) このように一切を自己とする¹²³聖者は、あらゆるところに等しさを見、六ヵ月の間常に集中し、音声のブラフマンを超える。(Cf.Mait. U. 6.28, Hopkins [Great Epic] pp.45, 90.fn.2, Hopkins[1901] p.344, fn.1, Haas[1922] p.38, No.693)
- (31) 生き物が苦に落ちているのを見た後、土・石・金を等しく見て、この (ヨーガの) 道に専念する者は、迷って休止してはならない。
- (32) 種姓から除かれた者¹²⁴、あるいはダルマを求める女というこの両者もまた、この (ヨーガの) 道によって最高の境地に到るであろう¹²⁵
- (33) 不生にして古く、不老にして永遠なる、小さな者より小さく、大きな者より大きな、感官によって動かされない人が知覚するものを¹²⁶ものを、集中し¹²⁷ 気力満つ者は、自己 (のアートマン) によって直観する。(Cf.Frauwaller[1953] p.135.20-24))

¹¹⁴āvarto Ca. āvarto vātavikārah / udaramalādīnām āvartanaṃ śārīrasyaiva bhramaṇam iva vā / Cp. āvarto viṣayāntararasāsvādah /

¹¹⁵pratibhām upasargāṃs cāpy Ca. pratibhā kavitvoṭkarṣah / Cn. sakalaśāstrārthabhānam / Deussen: Anfälle von übernatürlicher Rückerinnerung und Besessenheit Edgerton[1965]: apparitions and supernatural appearances

¹¹⁶P. svātmanaiva D.,K.: ātmany eva

¹¹⁷P. traikālyam D.,K.: traikālye Cn. traikālye, prāthapūrvārātre aparārātre ca / Cp. traikālye, trikālanirvāhye /

¹¹⁸P. goṣṭhe bhāṇḍamanā iva D.,K.: koṣṭhe bhāṇḍamanā iva Ca. goṣṭhe gosamūhasya madhye yathā dugdhādi-pūrṇabhāṇḍe anekebhyo gobhya ekamanā rakṣitum cintayaty evam anekopasargaparāhatam ātmatattvam ekāgrāś cintayet /

¹¹⁹P. taṃ taṃ yukto D. taṃ ca mukto K. tat tad yukto

¹²⁰nābhiṣvajet Ca. na piḍayet / N. nābhiṣvajen na pariḡrṇīyāt / parigraho hi duḡkhāyety ukteḥ / Deussen: Er nehme keinen andern in seine Arme, nicht in Worten, Werken oder Gedanken Edgerton[1965]: embrace

¹²¹P.,D.: apavādayet K. abhivādayet Cn. apavādayet nindet, svārthe ṇic /

¹²²sadharmā mātariśvano vāyoḥ sadharmā sadrṣah / sarvasprṣann api śuciḥ gamanaśilo vā /

¹²³P.,K.: sarvātmanaḥ D. svasthātmanaḥ

¹²⁴varṇāvakraṣṭas Ca. varṇāv akraṣṭāḥ sūdrāḥ samkīrṇajāyato vā /

¹²⁵Hopkins は、「サーンキヤは上位三種姓、ヨーガは女性とシェードラを対象にしている」という Nīlakaṇṭha の注を引き、「この聖典は snātaka のみに説かれるべきもの」という MBh.XII.238.15 を取り上げ、この 238 章がサーンキヤ説のごとき教義を説いているため、サーンキヤとヨーガの相違の一つとして、教義の対象となる人々の範囲の相違を指摘している。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.114)

¹²⁶P. yad indriyair upalabhate naro 'calah D.,K.: yad indriyair upalabheta niścalaiḥ D.,K. の「動き廻らぬ感官によって知覚される」という読みがわかりやすく、Edgerton[1965] もこれに従っている。ここでは、P. の indriyair を upalabhate ではなく 'calah にかけて理解した。

¹²⁷P. yukta D. mukta K. yukta

- (34) 偉大な自己をもつ偉大な聖仙のこのことばは、心によって理解した後¹²⁸ありのままに述べられた。(このことばを)熟慮して、最高者との同一性に¹²⁹至るべし¹³⁰。それは、賢者たちが赴く生き物の帰趨¹³¹である。

[233 章] (D.241 章、8804-8823, K.247 章, cf.Br.P.237.1-20 (pp.762-763))

シュカは言った。

- (1) ここに、「行為を行うべし」そして「行為を捨てるべし」というヴェーダの文章がある。(Cf.MBh.XII.234.3) 知識 (vidyā) によっていかなる場所 (dis) に行くのか、行為によっていかなる場所に行くのか¹³²。
 (2) まさしくそれを私は聞きたい。尊者は、私にそれを語れかし。しかし、それは、相互に異なる形において、対立している。

ビーシュマは言った。

- (3) このように言われて、パラージャラの息子は、彼の息子に答えた — 行為と知識からなるこの滅と不滅について語ろう。
 (4) 知識によっていかなる場所に行くのか、そして行為によっていかなる場所に行くのか。心を集中して聞くべし、息子よ。なぜなら、その相違は知るのが困難であるから (gahvaram)。
 (5) 「ダルマは存在する」と言われているのに、ここで「(ダルマは) 存在しない」と言う人がいるならば、私の立場はその人のと似たものとなろう。
 (6) ヴェーダが基盤を置く次の二つの道がある。活動の特徴とするダルマと、停止において明瞭に語られた¹³³(ダルマである)。
 (7) 人は¹³⁴行為によって束縛されるが、しかし知識 (vidyā) によって解放される。それ故、彼岸を見る行者たちは、行為を行わない。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.161,fn.1)
 (8) (人は) 行為によって、死後、形をもち、十六 (の構成要素) を本性として¹³⁵ 再生する。知識によって、常に、不動を本性とする不動なものとして¹³⁶ 再生する。
 (9) しかし、大変に認識の不足した¹³⁷ある人々は、行為を称賛する。それ故、彼らは喜んで体という毘に (dehajālāni) 近づく。
 (10) しかし、最高の認識に達し、ダルマの完全さを見る人々は¹³⁸、行為を称賛しない。川で水を飲む者が、井戸を称賛しないように¹³⁹。

¹²⁸ anudr̥śya Cn. anudr̥śya guruvacanam anu śabdato 'rthataś ca jñātvā /

¹²⁹ P. parameṣṭhisātmyatām D.,K.: parameṣṭhisāmyatām

¹³⁰ P. ceyāt D.,K.: cemām

¹³¹ P.,K.: yām bhūtagatiṃ D. cābhūtagatiṃ Ca. (reading cābhūtagatiṃ) abhūtagatiṃ tattvagatiṃ / N. ābhūtagatiṃ bhūtasamplavaparyantaṃ /

¹³² 233 章 vv.1-14, 18,20 は Edgerton の英訳がある。(Edgerton[1965] pp.274-275)

¹³³ P.,D.: subhāṣitaḥ K. vyavasthitaḥ Ca. (reading svabhāvitaḥ) svabhāvitaḥ svayaṃ mayokta ity eke pāṭham arthaṃ ca manvate, tac cintyam /

¹³⁴ jantuḥ Johnston はここでの jantu の用例を jīva との関連で言及している。(Cf.Johnston[1937] p.46) Edgerton[1965]: a creature

¹³⁵ (「16 の構成要素からなる人」は、Praśna U.6.1-2(śoḍaśakala puruṣa), Bṛhad U.1.5.14-15(「第 16 番目の部分が恒常なもの、アートマン (ātmaivāśya śoḍaśī kalā)»), Chānd. U. 6.7(śoḍaśakala puruṣa), などに見られる。(Cf.Haas[1922] p.29, No.501, Hopkins[Great Epic] p.168)

¹³⁶ P. avyayo hy avyayātmakaḥ D. avyaktam hy avyayātmakam K. avyayo hy akṣarātmakaḥ D. と K. の読みはそれぞれ、P. のように avyaya が 2 回繰り返されるのを回避したものか。

¹³⁷ P. svalpabuddhitarā D. svalpabuddhiraṭā K. svalpabuddhitayā

¹³⁸ dharmanaipūnyadarśinaḥ Cs. dharmayoḥ pravṛtīnivṛtīrūpayor naipūnyam śaṃsārapradānamokṣapradā-naśakti-
tvaṃ, tat paśyantaḥ /

¹³⁹ kūpaṃ nadyām pibann iva Deussen: wie der aus dem Flusse Trinkende nicht dem Brunnen Edgerton: as one drinking in a river (does not care for) a well

- (11) 人は、行為の結果として、快と苦、有と無(再生と死)とを得る。知識によって得るのは、そこに到った後悲しまないことである。
- (12) そこに到れば死ぬことはなく、そこに到れば再生することなく、そこに到れば老いることなく¹⁴⁰、そこに到れば成長することはない。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.88, fn.3)
- (13) そこはかの最高のブラフマンであり、顕現せず、老いず、永遠にして、妨げなく、疲れなく、不死にして¹⁴¹離れることなき (aviyogin) ものである。
- (14) そこでは、人々は(快と苦など)対立するものによって苦しむことなく、精神的行為によっても¹⁴²(苦しむことはない)。(人々は)あらゆる面で等しく、親切で、あらゆる生き物の幸福に喜ぶ。
- (15) 知識からなる人は、息子よ、行為からなる人とは異なる。(同一の)月は、新月では微細な部分として(別の様態で)存在すると知るべし¹⁴³。(Cf.MBh.XII.293.4)
- (16) このように聖仙によって¹⁴⁴詳細に言われたことは(cf.Hopkins[Great Epic] p.26)、天空にねじれた糸のような新たに生まれた月を見た後に、推理することができる。
- (17) 十一の変異¹⁴⁵を本質とし、部分の集合から形成されたものは¹⁴⁶、「形あるもの(身体)」と言われる。それは、息子よ、行為と属性を本質とする(karmaguṇātmaka)と知るべし¹⁴⁷。(Cf.MBh.III.203.29ab, Hopkins [Great Epic] p.37)
- (18) あたかも蓮の花の上の水滴のように、そこ(形あるもの=身体)に住む神を、(行為の)棄却によって得られた本性をもつ¹⁴⁸恒常なる知田者と知るべし。(Cf.MBh.III.203.1, XII.180.24ab, Hopkins [Great Epic] p.37)
- (19) タマス、ラジャス、サットヴァを個我(jīva)の属性であると知れ。個我をアートマンの属性と知れ。アートマンを最高のアートマンの(属性と知れ)。(Cf.MBh.XII.180.24cd, Johnston[1937] pp.44-45)
- (20) 個我の属性は意識を伴っており¹⁴⁹、それが動き、一切を動かすと¹⁵⁰、(人々は)語る。七つの世界を活動させたのは¹⁵¹それよりも高次のものであると、地を知る人々は¹⁵²語る。(Cf.MBh.III.203.33, XII.180.25, Hopkins[Great Epic] p.38)

(2000年9月25日 受理)

¹⁴⁰P. na jīryate yatra gatvā D. na punar jāyate yatra

¹⁴¹P.,K.: amṛtaṃ D. avyaktaṃ

¹⁴²mānasena ca karmaṇā N. mānasena ca karmaṇā saṃkalpena /

¹⁴³K. は次の行を挿入して三行詩としている。

vidyāmayam taṃ puruṣam nityam jñānaguṇātmakam /

¹⁴⁴ṛṣiṇā Ca. ṛṣiṇā vedena Cn. bṛhadāraṇyaka(1.5.14)darśinā yājñavalkeyena /

¹⁴⁵ekādaśavikārātmā Ca. bhūtāni ṣaḍindriyāṇi ity ekādaśavikārāḥ /

¹⁴⁶Duessen は、aus der Zusammensetzung von Teilen gebildete Ātman とし、身体は、アートマンの様態と捉えているようである。

¹⁴⁷K. は次に以下の詩節を挿入している。

tasmin yaḥ saṃsthito hy agnir nityam sthālyām ivāhitah /

ātmānam taṃ vijānīhi nityam tyāgajitātmakam /

¹⁴⁸P. tyāgajitātmakam D.,K.: yogajitātmakam Hopkins[Great Epic] (eternal) but overcome by its association D. では、「知田者は恒常な存在であるが、仮の姿として物質世界と関連をもつ」と理解される。P.の意味は、「知田者は恒常な存在であるため、行為の棄却をその本質としている」ということか。蓮の花と水滴の比喩の意味は、「結合していても相互に影響を受けない」ということであるから、P.,D.の読みはともに可能であろう。

¹⁴⁹sacetanam jīvaguṇam Cn. jīvaguṇam jīvaguṇena caitanyena yuktam / Cv. jīvaguṇam acetanam svaniṣṭhacaitanyasyāpi parmādhīnatvād acetanam iva jīvaguṇam vadanti /

¹⁵⁰P.,K.: ceṣṭayate D. jīvayate

¹⁵¹P. prāvartayad D.,K.: prakalpayad

¹⁵²kṣetravidō Deussen: die Kenner des Kshetrajñā Edgerton: Knowers of the Field